



国宝・彦根屏風を読み解く

彦根城博物館

学芸員 高木文恵

近世初期風俗画の傑作

ここで紹介する風俗画は、代々彦根藩主であった井伊家に伝来したことから『彦根屏風』の名があり、一般にこの名称で広く知られています。しかし、初めから井伊家が所持していたわけではなく、江戸時代後期頃に入手したものとみられます。譜代大名の筆頭という家格を誇る井伊家は勿論、数多くの屏風を所有していました。その中で敢えて「彦根」の名を冠して呼ばれるということは、井伊家所蔵の屏風を代表する名作と認識されていたと考えてよいでしょう。

室町時代の終わりから江戸時代の前期にかけて、後に「近世初期風俗画」と総称される風俗画が大流行しました。当時は、亡くなった後の来世ではなく、今生きている現世に関心が集まった時代です。描かれた画題は、洛中洛外図や花下遊楽図、南蛮図など、実に豊富でかつ華やかなものでした。

彦根屏風は、この近世初期風俗画の代表的な作品です。江戸時代の寛永年間（1624～44）

の制作と考えられており、当時の京の遊里・六条三筋町の様子を描いていると推定されています。それまでの風俗画には、季節を明示した屋外での遊楽の様子が描かれていましたが、寛永期頃には遊楽の舞台が邸内へと移行していきました。彦根屏風も、こうした流れの中で捉えることができます。

この屏風には15人の男女と1匹の犬が登場します。遊里という場所ですから、若い女性には遊女、若い男性は客とみられます。3人の少女は、遊女見習いの禿、向かって左



禿

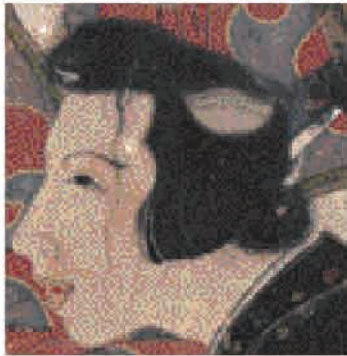
隅の三味線を調弦中の男性は、音楽を生業とする座頭で、遊女に三味線を教授しているようです。脇息にもたれかかる中央の中年女性



彦根屏風・全図 彦根市蔵

は仕切り役、背後の男性は主人ではないかとみる意見があります。

大変印象的なことに、彦根屏風の画面は、左上に立てられた屏風以外には背景は一切描かれず、金箔で覆いつくされています。そして、この金地を背景に、きわめて洗練された感覚で人物が緊密に配置されています。このような金の効果は、俵屋宗達（生没年不詳）の後期の作とされる『風神雷神図』屏風（国宝、京都・建仁寺蔵）や『舞楽図』屏風（重要文化財、京都・醍醐寺蔵）、狩野山雪



極めて細いほつれ毛

巧みな構図もさることながら、この画の大きな魅力の1つは、きわめて精緻な描写です。髪の毛の生え際の1本1本、絞りなどの細かな衣装文様の1つ1つ。恐るべき筆力です。さらに、衣装の光沢のような、ものの質感までも

表そうとする執拗なまでの描写には、「なまなましい」という評も与えられました。



絹の光沢と立体的な絞り文様

人物の表情に漂う倦怠感

画面は向かって右2扇と左4扇の2場面に分かれます。従来、右は屋外、左は屋内を表すと考えられていましたが、いずれの人物も

履物を履いていないことから、右も屋外とは限らないとする意見があります。

右から3番目の、刀にもたれて異様な姿勢をとる男は、いわゆる「かぶき者」と呼ばれる若衆です。戦国の世が終わり、徳川幕府が着々と体制を整えて統制を強めつつあった時期、これに反発して異装姿で徒党を組

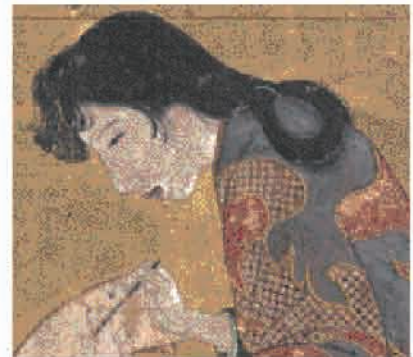


「かぶき者」

み、乱暴狼藉をはたらいたのが、かぶき者です。人びとは、彼らを恐れると同時に、共感を覚えていました。それは、若い女性がかぶき者の扮装をして演じた阿国歌舞伎が、民衆の熱狂的な支持を得たという現象からも察することができます。

しかし、この「かぶき」の風潮に満ちあふれていたのは慶長年間（1596～1615）頃までで、幕府の厳しい処罰によって彼らは徐々に力を失っていくことになります。この屏風に登場するかぶき者には、すでに荒ぶれた様子を見いだすことはできません。

画面左の場面では、屏風をバックに、あるいは三味



艶文を書く遊女

線（すごろく）を奏で、またあるいは双六に興じています。さらには艶文（つやぶみ）（恋文）をしたためる姿も見え

ますが、これらは「^{きん きしよが}琴棋書画」の見立てとされています。^{たしな}琴棋書画とは、^{いご}古来中国の知識階級が嗜むべき^{きん しちげんきん}琴（七絃琴）・^{囲碁}碁・^書書・^画画

の4つの技芸を指します。

日本でも中世からさかんにこの画題の絵が制作されましたが、彦根屏風では、琴を三味線、^碁碁



双六

碁を双六、書を艶文、画を画中画の屏風絵というように、^{とうせい}当世風俗に見立てているのです。

遊里の場面は当世風ですが、屏風絵に描かれる水墨山水図は室町期の様式を示し、華やぐ場面に深みを与えています。しかも、その筆はゆるぎなく、水墨山水に相当熟達した画家の存在が想起させられます。



画中画の水墨山水画

また、向かって右から2人目の^{ばしやう}芭蕉文様の小袖の女性^{ようきやく}性は、^{うた}謡曲「芭蕉」に登場する芭蕉の精とみる興味

深い説が提示されるなど、近年、彦根屏風に内在する世界を読み解く試みも盛んに行われています。

このように、彦根屏風は、単に当時の風俗をあらわしただけの画ではなく、伝統的・超越的な要素が随所に組み込まれているのです。

既に述べたように、彦根屏風の制作時期とされる寛永年間、幕府の支配体制が次第に強化された時期にあたります。統制の手はこの屏風の舞台である遊里にも及び、寛永6年

(1629)、^{ゆうじよ}遊女が主役の女歌舞伎が禁止され、

同17年には六条三筋町にあった京の遊里が洛外朱雀野の島原に移転させられました。

こうした状況のもと、人びとの間には一種のあきらめのような霧囲気が漂っていたのでしようか、遊里という華やかな場でありながら、人物の表情には、どこか虚ろな、倦怠感のようなものが現れています。そして、この表情と緊密な構図とがあいまって、画面全体に深い陰影が感じられます。数ある近世初期風俗画の中で、この図ほど人間の深い心理を表現している例はありません。

華やかな風俗

この屏風はまた、当時の最先端の風俗を知るうえでも格好のテキストとなります。

当時の遊里は、極めて高い教養を必要とする一種の文化サロンで、流行の発信源でもありました。

この時代、女性が初めて^{まげ}髷を結ったことは注目に値します。彦根屏風では、唐輪髷をはじめとする多様な結髪を見いだすことができます。それまでの女性は、向かって左端の人物のように、髪を垂らすのが一般的でした。女性が、髷という男性のファッションを採り



唐輪髷

入れたわけです。禿と対峙して三味線を弾く人物は女性ですが、よく性別を間違われるのは、髷の形を男性のものと思い込んでしまう



髷を結って三味線を弾く遊女

ことが背景にあります。

しぼ すり
絞りや摺
はく
箔をふんだ
んに使った
華やかな小
袖、南蛮買
易によって
日本にもた
らされて急
速に広まっ
た煙草、同
じく南蛮よ



洋 犬

りもたらされた洋犬のペットも登場します。煙草を吸う煙管は、当時のものはかなり長く、時代が下がるにつれて短くなっていきました。また、当時の遊里の教養・遊びとして欠かせない三味線や双六なども盛り込まれています。



柄の長い煙管

彦根屏風のその後

この彦根屏風への関心は江戸時代より高かったようです。明らかにこの屏風の影響のもとに制作されたと考えられる作品や、模写作品が少なからず確認できるからです。多くは、精巧な模本の写しかと思われませんが、中には実物を直接写した可能性が指摘されている作品もあります。彦根屏風は、創作意欲を喚起させる画といえるでしょう。

特に幕末から明治期にかけて多くの作品が確認でき、当時、彦根屏風ブームともいうべき現象がおこったのではないかと想像されます。



彦根屏風をも
とにした画
個人蔵

作者は誰か

それでは、この屏風の作者はいったい誰でしょう。残念ながら、落款（サインと印）がなく、断定はできません。近世初期風俗画の多くがそうであったように、幕末から明治にかけては、岩佐又兵衛筆と考えられていました。

現在は、狩野派の秀逸な絵師と推定されています。画中画の屏風絵にみる水墨山水図の出色の出来から判断して、漢画の技法に精通した人物の作と考えられること、人物描写の基本形式が狩野派の傾向に近いこと、琴棋書画という漢画系絵師の必須の画題が盛り込まれていることなどが理由として挙げられます。

具体的には、狩野山楽（1559～1635）や狩野興以（？～1636）、近年は、狩野長信（1577～1654）とするという見解が示されました。また、狩野派の主流からはずれた老練な絵師とする意見もあります。

寛永年間、幕府の御用の中心を担っていたのは、桃山時代に活躍した狩野永徳の孫の狩野探幽（1602～74）です。若きエリートは、これまでの濃密で華やかな狩野派の画風、瀟洒で淡泊なものに一変させました。彦根屏風を描いたのは、一世代前の実力派絵師が、渾身の力を込めて描いた金字塔だったといえるでしょう。

彦根屏風は、遅くとも明治の初め頃までには屏風の形を解かれてしまい、戦後、1面ずつの額装になりました。現在、屏風の形に戻す文化財修理を進めています。修理後初のお披露目は、彦根城築城400年祭の期間中、平成19年9月28日から10月26日の1ヶ月間。会場は彦根城博物館です。本来の姿を是非ともご覧ください。-

滋賀文化財教室シリーズ No.224号

発行年月日 2007年3月9日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525